

令和6年度第1回 北九州市立美術館協議会議事録（要旨）

名称 令和6年度第1回北九州市立美術館協議会

報告

報告1 令和5年度事業実施結果について

報告2 美術館友の会の活動状況について

議事

議題1 北九州市立美術館運営評価について

開催日時

令和6年8月22日（木）14時～16時

開催場所

北九州市立美術館本館 アネックス・レクチャールーム

出席者

（会 長）	菅 章	大分市美術館館長
（副会長）	森山 秀子	久留米市美術館副館長
（委 員）	外山 典子	北九州市立藤木小学校校長
	新谷 幸子	福岡県立美術館普及課副長（元八幡中央高等学校教諭）
	原田 美紀	原田・川原法律事務所弁護士
	野依 智子	福岡女子大学国際文理学部教授
	三上 和子	北九州市女性団体連絡会議
	中村 雄美子	NPO北九州子育て・親育ちエンパワーメントセンターBe e代表
	大久保 大助	NPO法人K I D' s work 代表理事
	桑園 英俊	社会福祉法人桑の実会理事長
	速水 豊	三重県立美術館館長
	門田 彩	北九州市立大学文学部准教授
	立石 洋子	北九州美術家連盟
	玉城 夏子	読売新聞西部本社事業推進室長兼事業部長
	岩渕 邦夫	朝日新聞西部本社統括センター長
	梅林 繁喜	北九州商工会議所総務課長
（事務局）	後小路 雅弘	北九州市立美術館 館長
	上田 伸一	北九州市立美術館 副館長
	三宅 智美	北九州市立美術館 普及課長
	那須 孝幸	北九州市立美術館 学芸課長
	阪上 壮一郎	北九州市立美術館 普及係長
	重松 知美	北九州市立美術館 学芸課係長
	香月 敬二	北九州市立美術館 普及課
	奥田 亜希子	北九州市立美術館 学芸課

議事録（要旨）

事務局	議事の説明、傍聴者の確認（０名）、館長挨拶
報告 1	令和５年度事業実施結果について
報告 2	美術館友の会の活動状況について
事務局	報告 1 及び報告 2 についての説明
議題 1 北九州市立美術館運営評価について	
事務局	議題 1 についての説明
会長	委員の皆様から、改善への提言も含めて非常に美術館にとって参考になるご意見が多かった。では、まず評価項目 1 の「作品資料収集・環境管理・保存」、評価項目 2 の「公開、調査研究、展覧会」について、意見、質問をお受けしたい。
委員	５ヵ年目標を掲げ、年度目標をモレなく定めて取り組んでいることに敬意を表したい。収集、管理保存、データベースという事は、私も公立美術館に長年勤めている中で、どうしてもその収入を要求され、すぐに収入につながるものは注目されるが、そうでないものは等閑視される部分があるが、北九州市美は、それらを目標として明確に上げて取り組んでいるところが素晴らしい。中でもデータベースに関しては、近年さらに重要性が高まってる感じがする。それで是非、人員、予算をつけていく、美術館として、これらは重要な事業であるということを明確に言い続けていくことが望ましいと思う。ウェブに、美術館が持っている情報や知識を載せることは、現在では世界の美術館の常識になりつつある。国境を越えて、美術館が持っているコンテンツを全部明らかにする時期に来ていると思う。これは美術館のプレゼンスを高めることにもなるし、長期的に見ると美術館の発展につながると思うので、即利用者や収入が増えることではないが、美術館にとって将来ますます重要なミッションの一つになると思っている。 一つ質問だが、展覧会の中で松野一夫展だけが、他に比べて入場者数が非常に少ないが、何か特別な理由があるのか。同じように広報したが、作家の知名度がなかったのか、美術館の見解を聞きたい。入場者数こそ少ないが、美術館としては絶対やるべき重要な展覧会だと思う。令和５年度の展覧会の中でも、文化的に見た場合、また全国的さらにはグローバルな視点から見た場合でも、一番意義のある、重要な、美術館がやるべき展覧会と思われる。なのに入場者数は少ないのは、大変もったいないと感じている。
事務局	まずは、作品の収集保管等について評価していただき、感謝する。美術館職員としても大変励みになる。松野一夫展については、もっと入って欲しかった。昨年度は企画展が軒並み数が少なくて、１万人に達した展覧会が一つもない。昨年度全体で広報に非常に苦しんだ年であった。特に、松野一夫は大正末期から昭和戦後にかけて活躍した挿絵画家、イラストレーターで、知る人ぞ知る作家であり、市内の図書館や文学館、書店等に働きかけて広報に力を入れたのになかなか厳しかった。一方で SNS にも力を入れて、少し効果が見えた展覧会でもあり、東京はじめ関東方面から展覧会の問い合わせをいただき、図録の通信販売は、通常の展覧会より多くの注文をいただいた。単館開催であったが展覧会規模としては、それなりの規模であった。入場者数は少なかったが、図録、研究、作品収集にも広げていきたいと思っているので、今後も地元が誇る挿絵画家として調査を続けていきたい。

委員	データベース化について着実に進められており、地味で目立たない業務ではあるが、美術館の底力になるものだし、必須な仕事であり、それが進んでいることが分かって、大変評価できる。予算も人員も不足している中で、データベース化の方にリソースを割くのが難しいという状況だと思う。作品については難しいと思うが、例えば図書については、ボランティアや学生の活用で補うことが出来るかもしれないと考えていたが、文化庁のイノベートミュージアムに採択されたことは非常によかったと思っている。この事業について、分かる範囲でどのようなスケジュールで進めていくのか、今までよりもスピードが速まるのか、充実したものになるのか教えて欲しい。また、文化庁のイノベートミュージアム事業以外に他の外部資金を得る申請をしたり、予定があるのか教えて欲しい。
事務局	今年度、採択された文化庁のイノベートミュージアム事業であるが、6月に採択の連絡はあり、現在、実施に向けて、入札等の手続きを進めている段階である。事業内容としては大きく二つの分野があり、一つが、この美術館は磯崎新氏の設計であるが、同氏の建物の顕彰をやっていくということで。市内には4つ同氏設計の施設があり、また連携と言う意味で、大分市にも2カ所あり、それらをデジタルアーカイブ化して残していくこと。二つ目が、データベース化にも関わっているが、高精細画像データベース化していくこと。これは美術館自体の作品としての蓄積もあるが、もう一つ、ミュージアムツアーがリアルな方法では事業予算がなくなったところだが、今年度はデジタル技術を使ったミュージアムツアーを計画しており、素材にそれらを使って、美術館と各教室をオンラインで結ぶ、あるいは、先生方に、本館で蓄積した高精細デジタル画像を教室で展開してもらうことを通じて、新たな見せ方が出来るのではないかと考えている。これはリアルに勝るものはないぞと言われると、そうかもしれないが、観点を変えていくと、例えば、磯崎新建築は、実際に来館した時には、バスで来て、正面から入っていくことになるが、デジタル画像化することによって、例えばドローン画像で、かなり高いところから正面に入っていくと、内部でも天井から見下ろす等、色々な見せ方が出来る。さらに授業中だけではなく、映像はホームページにも上げるので、オンデマンドで見られる環境をつくる。だから、実際に来館出来る子供以外にも、何らかの理由で来館出来ない子供も多くいると思うが、その子たちも画像プログラムは見る事ができる。あるいは子供に限らず幅広い年代が鑑賞出来る。今年は、この取り組みの元年なので、今後、毎年充実させていき、デジタルによる鑑賞の仕方を確立していきたいと思っている。
事務局	その他の外部資金の営業については、学芸員に関する様々な民間の助成金があり、毎年応募はしている。なかなか通らないが、ここ数年は、2年に1回ぐらいの割合で通っている。
事務局	調査研究に関する予算はなかなかつきにくく、外部資金に頼るところが大きいのだが、申請してもなかなか採択されるというものではないので難しい。最終的には科研費を取れるようにしたいと思っているが、美術館が科研費を申請出来る組織として認められるために、いくつかのハードルがあり、それを越えてやっと申請ができるのだが、なんとか研究して、私の在任中に実現出来ればと考えている。

委員	先ほど松野一夫展の話が出たので、その関連で発言したい。当社は松野一夫展の名義後援をしており、今年も 50 周年の記念事業に参加している関係で、本社の事業部のメンバーからも提言があり、調査研究に基づいた学術的な構成がベースにはあると思うが、メディアの人間としては、北九州は発祥の地でもあるし、広報的に非常にもったいない場面があった。名義後援と言っても、企画からもう少し参加させてもらえたらと思う場面が、今年の事業でも議論で出ており、例えばチラシ、その構成等も、本当にすごい画業を残された松野一夫氏なのに、小倉では知名度が無いので、例えば最後の方に展示されていた百年前の旦過を描いた巻き物とか、そういうものを小倉っ子、北九州っ子は知らない。北九州の人は地元が大好きなので、もう少しその展示を、一部全面に打ち出すとか、そういうことが出来ればなと私達は議論していた。だから、展覧会のタイトルやポスターデザインはメディアも参加して早い段階でデザイン会議を開くとか、ポスターのメインビジュアルやキャッチコピー等を一緒に検討するとか、デザイナーに複数案を出してもらって、みんなで考えたりとか、可能ならデザインコンペを実施するとか。その学術的なところ学芸員に頼るのがベースであるが、集客や多くの人に知ってもらう機会を増やす工夫が出来たらよいと事業部で議論している。
事務局	今年度、マスコミの皆様と実行委員会を組んで、様々な展覧会を開催しているところだが、時間的な制約があり、思ったような広報が出来ていないと感じており、プロのマスコミの皆様が歯痒さを感じるのも当然かなと思っている。改善策としては、もう少し十分な時間を持って、実行委員会に入るリードタイムをもっと長く取って、企画を詰めた学芸員から、実行段階に関して、もっと議論をしていく必要があると思っている。デザインに関しても、プロの皆様の感覚もあるし、一方で限られた実行委員会予算の中で、地元業者優先の決まりもあるので、そのあたりで様々な調整が必要となってくる。
委員	評価項目の 2「公開～調査研究・展覧会～」の分析改善の提言で、学芸員の負担が多いと推察されるため、業務分担等を考慮されたいとあるが、現在この美術館でどういう業務になっているのか伺いたい。やはり美術館においては、学芸員の力が大切だと考えており、事務局との連携は必要であるが、やはり学芸員には学芸員でないと出来ない仕事を主にすべきだと考えるのでお伺いする。
事務局	美術館には普及課と学芸課の 2 つの課があり、大きく分けて、展覧会の調査研究、今回の評価項目でいけば、1 番 2 番 3 番までが、学芸課が中心に担っており、目標も学芸課で立てている。あらゆる業務については、普及課と調整しながら行っているので学芸課が単独で進めていくことはないのだが、主導権をもって進めている。項目 3 に関しては、普及課と連携している要素も多くあり、また普及課は 3 番 4 番 5 番を主に担っている。予算や庶務に関する事は普及課が行い、美術展の企画立案や交渉、著作権に関する事は学芸課が行っている。
会長	事務局は、学芸員も含めての事務局である。学芸課と普及課では、事務の内容が異なる。館によっては、普及課と学芸課の仲が悪く、非常にうまくいっていない館もあるが、北九州市立美術館は非常にうまくいっているのではないかと見ている。お互い連携して両輪となってやるのが大事。お互いでうまく連携して負担を少なくしていけるかだと思う。

委員	自己評価でも広報の部分がBというところが、まさに、作品の収集等の部分は素晴らしく評価が出来て、後はマーケティングのところなのだろうと感じている。限られた予算と時間制約があることは十分理解出来るが、マーケティングがやはり重要であろうと思う。その落とし込みが、集客、動員につながっていくとの感想を持つので、時間が限られてるとは十分理解できるが、せっかく高評価を得ている作品収集のところが、広報のところで花開くように、後援をいただいたところの知見を活かせば、限られた予算の中でも可能になるのではないかと直感的に思った。
委員	無料招待券についてだが、北九州は昔から企業文化で、企業の福利厚生で、無料招待券を配っていたという話を聞いている。有料率が低くて無料が増えるということは、悪いということではないが、有料率を上げること、厳しい財政の中、収益を確保する上で、無料券を配るということが、逆に、将来的に良質な展覧会の誘致や市の文化振興、文化レベルの向上を阻害することにならないか。文化を市民や企業が支えていく、主催者の収益もあるが、大きく、文化振興をみんなで支えるという意識が大切なのではないか。だからメディアも含めて招待券は上限枚数を下げるとか、どうしても必要な場合は割引価格で買い取りにする等、将来的には検討して欲しい。
会長	なかなか難しい問題。普及性と収益性を、どのようにバランスを取っていくか。ただし北九州の場合、収入は美術館が使えるわけではなくて、市の収入になるとのこと。委員が言われたのは、そうした収益性が高ければ、文化活動に対する財政当局の理解が得やすいということだと思うが、なかなかそのあたり難しい問題である。
事務局	有料率をどう高めるかという中で、本館の場合は、障害者の等級に応じたの無料や子供の無料、市民センターが生涯学習活動で集団で来館した方への無料等、無料で行っている取組はいくつかあるが、それによって、すそ野が広がっていく効果は勿論あると考えており、子供が親を連れて来る効果もある。全部否定するわけではないが、横山大観展で言うと、大体8割弱が有料だったので、入館者が45,000人を少し超えており、アンケートを取ると56%が市内の方だったので25000人。市民の40人に1人が、大観展に来てたという実績もあるので、なるべく多くの方に来てもらうため、招待券や無料の出し方については、今後のいろいろな展覧会を経験しながら、一番いいラインというのを見出していきたいと考えている。
事務局	招待券に関しては、過去に何万人も入っていた展覧会の中では、招待券を非常に多く出していたという話もある。現在も、子どもや障がい者、生涯学習等、無料のサービスで入っている人たちが増えている状況ではあるが、一方で招待券の配布は抑制的に考えており、今回の大観展の有料率が高かったように、メディアとも相談しながら抑制の方向で考えていきたい。
会長	有料率8割とはすごいと思う。普通は有料率5割程度ではないかと思う。ただマスコミと組んでやっている展覧会ではマスコミはどうしても有料率高めを望む傾向がある。しかし、場合によっては普及のために無料でも見て欲しいという展覧会もある。やはり展覧会の内容や実施主体によって考え方も変わるということだろう。

委員	私は昨年まで、小学校の校長をしていたのだが、この夏、「ミュージアムツアーなくなったんですか？」という問い合わせが多かった。今度はオンラインに変わる旨を答えても、皆さんの反応は芳しくない。小学3年生なので、やはり美術館に来てよかったと。作品をじっくり見るのではなく、美術館の雰囲気味わいたかった。そしてシビックプライドを高めるため、ミュージアムツアーはとても良かったと言う意見をたくさん頂戴した。これは市の予算がかかっているから、戻して欲しいと言っても戻らないっていうことは重々承知している。私は北九州市文化芸術推進プラン検討委員会の委員になっており、その会議の中で、親向けにアンケートを取っていたのだが、自分たちは子供を美術館に連れて行ったことはないが、是非学校で連れて行って欲しいとの回答がすごく多い。子供を芸術文化に触れさせたいが、親たちには時間がないとか、やはり美術館は敷居が高く、学校で連れて行ってもらえれば有難いとの回答が相当数来ている。この会議に参加した大学生が、ミュージアムツアーの経験がない学生だったが、北九州市の美術館に1回も行ったことがないと言っていた。
委員	ミュージアムツアーが無くなったことはとても残念である。デジタル化はもちろん重要であるが、本当に、学校が連れて行かれないと、一生行かない人もいる。これはミュージカルやコンサートも同じだが、親に連れていく余裕がない家庭が本当に多い。だから一生行かないまま大人になってしまうことをどうにか出来ないか。もう一つは、来館できない方、例えば特別支援学校の子供さんについては経済的に行けない、もしくは保護者が連れて行けない状況が学校の中にある。北九州市はバスを持っているので、それで連れて行くことはあると思うが、特別支援学校で重度の障害を持つ子は、リフターが付いたバスを借り上げないといけない等で、もう美術館自体に来られないということもあるので、予算の確保は本当に難しいと思うが、例えば学校数を減らしたり、せめて特別支援学校だけでも、というような何か工夫をしてでも、継続もしくは新規に実施して欲しい。
会長	実際に子供たちを連れてくるのが、マンパワー的に難しいのか、それとも安価なウェブ上でやろうとしているのか、事務局の方針を聞きたい。
事務局	昨年度、市長が変わり、市政変革の取組みの中で、今まで継続してしてやってきた事業を全部、棚卸しをして見直していくことをやっており、その中で、美術館に限らず、子供を現地に連れて行って、何かを経験させるような事業に関しては軒並み見直しという形になっている。現物とバーチャルのどちらがいいのかと、比較論で言うと厳しい面があると思うが、これまでのミュージアムツアーで言うと、送迎バスは、北九州市が保有するバスではなく、美術館が130校分、年間2,000万円程で民間から借り上げ、プラス若干の事務費がついて、毎年の事業予算としていたが、それが令和6年度から無くなった。我々としては、子供に限らず、美術をどうやって身近に感じてもらえるのかというアプローチが年代を問わず必要だと理解しており、そういう意味でのデジタルの事業展開でもある。だから子供が本当に実体験をしたいのであれば、美術館がまた予算を再要求するなり、また子供に特化した他の局にお願いするとか、いろいろなアプローチの仕方がある。そこは市民の代表でもある、議会の意見も聞きながら、次年度に向けて考えていきたい。今年度については文化庁から採択されたイノベートミュージアム事業を活用しながら、デジタルで鑑賞する手立てを確立したいと考えている。

会長	デジタル関係の大きな一つの流れなので、それはそれで教育の場でも動いていくと思う。本件は予算的なものが、かなり大きな要因だと思う。いずれにせよ、子供たちが本当に美術館に親しんで足を運んでもらうこと。まずはデジタルに出会って、実際見に行きたいという気持ちになってもらうことが大切だと思う。
委員	障害福祉事業所が 40 ぐらいあり、その中には発達障害、精神障害、身体障害、全盲の人、それら事業所をまとめ現在運営している。もちろんリアルに体験することは、もう最優先の課題だと思うが、デジタルのことを考えた時に、例えば、学齢期だけに限らず、大人でもひきこもりの方もいる。その方々は、美術にとっても興味があったり、自分の中で独自のアート活動をやっている方もいる。それから、全盲の方で美術館に行き、絵の解説をして一緒に味わうという活動もやられている。そういう意味で、デジタルがリアルかの議論ではなくて、デジタルはデジタルで必要としている方々がいる。例えば美術館に来て、私たちはこの環境が素晴らしいと感じるが、例えばこの光線の視覚が強すぎるとか、空間で音が響き過ぎる等、色々な方々がいる。また、絵は見たいが黙ってみなくちゃいけない。例えば発達障害の ADHD の方はどうしても動き回ってしまう。そんな中でデジタルには別の価値がある。だからリアルな美術館は大好きだし、大切な空間であるが、障害をもつ方々のためにも、デジタル化というのは価値がある。5 番目の評価に、満足度が評価軸に上がっていた。その中で、今年度は評価が出来ていないということが上がっていた。評価項目が B とあるが、私は、そこは今年度、令和 6 年度に具体的に改革しなくちゃいけないと思う。あの北九州市立美術館の基本理念と基本方針を令和 5 年に読ませてもらったが、その中の一番最後に PDCA と書かれてあった。その中のチェックをして改善するところがとても大事で、アンケートの意味は評価をして改善するためのものである。我々もよく課題になるが、アンケートは取ったが、それが改善に結びつかないっていうところをどうするか。私も評価の中には具体的には書かなかったが、例えば「リビングミュージアム」という理念をキーワードにして、どうやってこのリビングミュージアムを実現するかを市民に問いかける。アンケートというのは、美術館に来た方にアンケートすることが一つと、美術館に来ていない方のニーズを知るところがある。私は、この委員になった時に初めてリビングミュージアムという考えの説明を受けて、とても共感したが、市民の方でこの理念を知らない方が多い。だから、来館者たちのアンケートを取るだけではなくて、市民は北九州市立美術館に何を求めているのか、また、美術館はリビングミュージアムという基本理念を持って運営しているという項目を立てて、アンケートが出来ればよいと思う。そのためには外部委員が必要だと思う。この中には、これだけ実績を持たれている方がいるので、その方たちを含めたり、もちろん IT 関係も必要だと思う。今後アンケートを実施する上では、そうした外部委員を構成したらどうか思った。
会長	外部評価ですね。美術館の評価方法として、ひと頃、非常に盛んにおこなわれていたが、この委員会もその機能を兼ねていると思う。今の話では、純然たる外部委員をつくってはどうかとの提案であるが、それも予算が伴うことなので難しい面があるだろう。そのような意見があったことは一応検討いただければと思う。

副会長	今まで話を聞いていて、ほかの美術館でも同じような問題があるし、また新聞社の方からは協力的な意見をいただき参考になった。広報であるが、今、一つの対策として学芸課の中にもう一人、広報担当を作って、そこを通して、もっと展開ができないかということをやろうとしている。しかし、担当の思いが強く、どうしてもその担当が広報を自分でやりたいという気持ちが強く、なかなかこれが、意外に難しいことである。それと、オンラインの話が出ているが、美術館に来られなくなった中学生に対しても、例えば出前授業などを行ってもいたが、もう今の時代はそれもなかなか難しく、また求められてもいないということで、オンラインを検討しているところである。私は決してオンラインあるいは複製を否定するものではない。大学生の時には、海外の作品を見に行くことは出来なかった。そういったものは複製物を通して鑑賞していたので、そのような鑑賞があってもよいと思っている。そしてオンラインであれば、もっと実際の空間も見せることが出来るし、生の声を聞くことも出来るので、決して無駄にはならない。有意義なことではないかと思う。だから出来るだけ早く実施していただきたい。
委員	松野一夫展を観覧したが、すごく興味深かった。入場者数がこんなに少ないのは意外であったが、やはり知名度は無かったのが原因かと思う。内容としては、このような地元画家がいたということを知ることができてよかったので、ぜひ今後も研究調査を続けて、次回発表の場を持っていただければと思う。
委員	市民センターが来るためには、市民センターが講座の企画が出来ないといけない。企画をしてもらうには、企画の要素を美術館側が見せていく。事例を見せたり、モデルを提案してあげないと、センターの館長や職員の講座イメージが湧かず、利用につながらない。だから、例えば市民センターの職員研修や館長研修を美術館でやって、美術館で使い方の研修を館長・職員向けにやるのが利用促進につながると思う。子どもの普及について鑑賞教室の数が伸びているのは素晴らしいと思う。ミュージアムツアーについては私も言いたいことはたくさんあるが、鑑賞教室が伸びているのは非常に良いと思っており、こちらを強化していく方法はあるかと思う。やはりリアルを見せること。
委員	広報の部分、私が2年か3年前ぐらいに、インスタ等出来ないかと提案をしていたら、その時は無理だと回答されたが、現在では、すごく頑張ってアップされていて、今ページを見ても、私はフォローをしているが、絵画のことがちゃんと分かってる人が作っているなど感じている。もう少し頑張る点があるとすれば、ハッシュタグをもっと工夫すると、今は、そのページに必要なことしかハッシュタグが載っていないので、美術とか美術館に興味がない人、例えばカフェのことを入れてみるとか、そういうふうにハッシュタグはもうちょっと工夫が出来るかと思う。それからキッズ&ユースデーも貴重な機会としてを設けているが、コンサートが終わっても、あまり展示室内に入ってもらえなかったという課題があると書かれてあったので、そこは子供が好きなスタンプラリーをして、回ったら最後にコンサートがあるよ、みたいにするとか、またはコンサートではなくて、なんかこう美術館の仕事、バックツアーがあるよ、としてみるとか、興味をそそるように工夫出来ないかと思う。それから先ほども委員が言われたが、市民センターの来館が5館ということに対して、市民センターも新たなことについてはやはり負荷がかかるので、それは美術館から示すか、あるいはすでにある市民センターの事業と絡めて、美術館に来ていただくか。今私が具体的にイメージしているのは、健康づくり事業とかがある。地域の高齢の方たちがウォーキングをした後に到津の森に行こうとか、ウォーキングをした後に、科学館に行ってみようとか、そういうことやっている。だから、ウォーキングの後に美術館賞をする提案は、すぐに受け入れてもらえると思う。すでにある事業と絡めてプラス美術から提案するかような感じにするとよいと思う。

委員	松野一夫展は私も観覧した。このような方が北九州出身というのを、初めて知ったが、先ほど広報のところで、旦過市場の100年前の絵の話があり、そういうところを広報に盛り込めるのは、やはり学芸員の方だと思う。広報担当者は、作家のことをそこまで詳しく知らないと思うので、やはり広報に学芸員が一枚かむ。どれくらいのパーセンテージというのは、労務管理上の問題と一緒に考えてもらえたらいいが、やはり学芸員が広報にからんでいくことが、必要だと思った。それと子供のミュージアムツアーだが、デジタル化と、実際のリアル体験を、別々に考えて、両方とも実施するってことがやはり必要ではないか。よく最近言われるのは貧困問題であるが、子供たちの体験格差がよく取り上げられている。家庭の事情によって、夏休の旅行にも行けないし、美術館にも博物館にも行けない。一日、親が置いて行ったお金でご飯を食べて過ごしている子供が今問題になっているというのは報道でも報告されている。そういう意味でも、リアルで美術館に来れるミュージアムツアーは、やはり今後もやる必要があると思っている。先ほどから話を聞いていると、予算的に問題なのはバス代の負担なのか。その問題が一番大きいのであれば、美術館に来る手段をもう少し考える。また、学校130校全部ではなく2年に1回、回ってくるようにする。回ってこない学校に関しては、中学生であれば学生証を見せれば無料で入れるようにするとか。本来はそういうところに予算をしっかりと割くのが、文化事業だと思っているが、その辺工夫を考える必要があると思った。それ市民センターで来たのが5館だけというのが、私も引っかかっており、市民センターのほかの事業と絡めるのが色々呼び込めることになると思う。市民センターの講座の中で一番人気があるのがここ数年は防災のテーマである。だから例えばこの森を活用した防災コンサート等で、一緒に勉強するようなことが出来たらよいのではと思う。
委員	今も、家庭の事情で美術館どころじゃない。昼ご飯も食べられないとか、そのような話を聞くと非常に胸が痛い。北九州がミュージアムツアーを行っていることが本当に素晴らしいことだと思っていた。実際に見に来るということ。これはなかなかできない。なんとかして美術館や学校関係者に頑張ってもらって、もう1回、ミュージアムツアーが復活するように働きかけをしてもらえないかと思う。美術館に来て気持ちがスーッとすると、成長しても悪いことをせずに絵を描く子供に育つのではないかなと思う。だから、とてももったいないと思う。

会長	委員の皆様の意見を伺って、まずは北九州市立美術館の活動が素晴らしいということを前提として、皆さん発言されたと思う。特に学芸課を中心に収集、展覧会、保存の素晴らしい活動がなされているし、それをサポートする管理部門が一緒になってやっている、そういう姿勢は本当に尊いものと思う。その上で皆様の様々な貴重な意見を聞かせてもらった。例えば委員が言われた、来館目的の多様化。これは前回も話したが、美術館には、単に美術品の鑑賞に来るだけではなくて、周辺の森を散策に来るとか、あるいは他の行事と一緒に、その中で美術館を楽しむとか、やはり人々のニーズや行動も多様化していく。そしてデジタルカリアルかという形で、二者択一するのではなく、それぞれの良さもあるし、必要性も、委員も言われていたが、美術館も昔のように一つの目的一つの使命だけで動く時代ではなくなってきた。やはり、いろんな人々、社会の多様化に対応し、いかに美術館が単なる、最大多数の最大幸福ではなく、色々なマイノリティーも含めて、そうした方々にも存在として美術館が必要であるという。予算の問題もあるが、予算だけあるいは収益効率だけで片付けられないと問題と思う。 また、私は会長としてここ数年見ていて、美術館の皆さんは非常に頑張られていると感じている。例えばデジタルアーカイブの問題は、前は本当に手がつかない、マンパワーも予算もないと言われていたのが、国の補助金等の外部資金を確保しながら着実に進めているのは素晴らしいと思う。今後も、館長、副館長、学芸課、普及課が力を合わせて、北九州市立美術館を素晴らしいものにしていって欲しい。 では、ただいまの事務局の説明、北九州市立美術館の運営評価について、評価結果を承認という形で、よろしいでしょうか。
-----------	---